Osaka University Knowledge Archive

Title	戦国期の権力と婚姻
Author(s)	西尾, 和美
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47112
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【30】

氏　　名	西（にし）　尾（お）　和（かず）　美（み）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０７２３　号
学位授与年月日	平成 18 年 11 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**戦国期の権力と婚姻**
論文審査委員	（主査） 教　授　平　　雅行 （副査） 教　授　村田　路人　　梅花女子大学教授　馬田　綾子

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、16 世紀後半に安芸毛利・小早川氏と伊与河野氏および瀬戸内海海賊衆来島村上氏との間に結ばれた婚姻関係を、権力論の観点から論じたものである。３部８章に序章・終章（補論１）とから成り、枚数は 752 枚（400 字詰め換算）である。

序章「本書の構成と視座」では、研究史をふりかえりながら、女性史研究や戦国期研究の問題点を指摘し、権力論の視座からする婚姻研究の有効性を確認している。そして戦国時代は旧秩序が解体し地域秩序が大きく変容してくるだけに、多様な相手と協力関係を結ぶことができる婚姻は、従来にも増してその意義を高めることになった、と述べている。

第１部「戦国末期における芸予関係の展開と婚姻」では、宍戸隆家嫡女の婚姻をめぐる政治的展開について論じている。そして、①宍戸隆家嫡女の最初の結婚相手は来島通康であった、②牛福は彼女と来島通康との間の子であった、③来島通康の死後、彼女が中風を患う河野通宣に再嫁して、毛利の血筋をひく牛福が河野家の当主として擁立された、と主張している。

第２部「戦国末期における芸予関係の展開と家臣団」では、毛利氏と河野氏との婚姻の背後で、家臣の派遣や使者の頻繁な往来があったことを明らかにして、小早川氏が豊臣政権より伊予を与えられる以前から、芸予権力の一体化が進んでいたことを明らかにした。また、宍戸隆家嫡女の生涯を概観しながら、通直（牛福）時代の河野氏権力と家臣団との関係を論じている。

第３部「織豊政権と芸予諸勢力」では、織豊政権の全国平定の波がおよぶなかで、地域諸勢力がそれにどのように相対し、芸予関係がどのように変容したかを検討した。そして、来島通総が河野氏から離反して、織田信長方となった背景に、河野氏家督をめぐる争いがあった、と推測している。また天正 15 年の河野通直（牛福）の死は病死であったのではなく、秀吉の命による「生涯」（死）であり、毛利輝元もそれを了解していたとする。

終章では婚姻の問題を、当事者やその親の問題として捉えるだけでなく、婚姻を支える家臣団の移動や人間諸関係の展開のなかで把握する必要があると述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文の第一の成果は、16 世紀後半の芸予関係を、広い視点から実証的に深く掘り下げたことである。一次史料が乏しいという悪条件にもかかわらず、筆者は丹念な読解と丁寧な史料操作によって、隠された歴史、消し去られた歴史の実像をみごとに復元してみせた。河野通直の死をめぐる考察はその代表的なものである。しかもこの時期は、地域社会が統一政権のなかに組み込まれてゆく時代でもある。そうした巨視的な視点から、地域の権力関係とその変遷をダイナミズムのもとに描いてみせた。ここにこの論文の大きな成果がある。

第二の成果は、婚姻の問題を地域社会の面的広がりのなかで捉えてみせたことである。戦国期の婚姻は、当事者男女やその親の問題であるだけではない。婚姻は領主間各層の人的ネットワークに下支えされて成立するものであるし、また婚姻によって女性方から家臣が流入するなど、家臣団構成にも変化を与えている。このように地域の多様な社会関係総体のなかに婚姻を位置づけた点に、本論文の意義がある。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。牛福（河野通直）の家督相続の経緯については、なお丁寧な説明が必要であろうし、本論文の実証的成果や婚姻論を戦国期の権力論一般にどのように生かしてゆくかについても、さらなる考察を求めたい。

良質の史料が乏しいなかでの立論であるだけに、筆者が提起した論点は今後もきびしい検証がなされ、訂正される部分も出てくるであろう。しかしそうであるにしても、本論文は芸予地域史研究はもちろんのこと、戦国期研究一般にとっても、大きな達成として受け継がれてゆくであろう。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。